

あぶつぼうごしよ
阿仏房御書

(宝塔御書)

御書全集 1304 六六行目〜8行目
編年体御書 469 六六行目〜8行目

通解

末法まつぼうに入はいつて、法華經ほけぎょうを持たもつ男女だんじよの姿よりほかには宝塔ほうとうはないのである。

もしそうであるならば、身み分の貴とうとさや賤いやしさ、立たち場ばの上うえと下したは関かん係けいなく、南無妙法蓮華經なむめいほうれんげと唱となえる人ひとは、その人自ひとじ身しんが宝ほう塔とうであり、その人自ひとじ身しんがまた、多宝如来たぼうにょらいなのである。

妙法蓮華經よりほかに宝ほう塔とうはないのである。法華經の題だい目もくは宝ほう塔とうである。宝ほう塔とうはまた南無妙法蓮華經なのである。

末法まつぼうに入いつて法華經ほけぎょうを持たもつ男女なんによの・すがたよ
り外ほかには宝ほう塔とうなきなり、若もし然しかれば貴き賤せん上じやう下げを

えらばず南無妙法蓮華經と・となうるものは我わ
が身み宝ほう塔とうにして我わが身み又また多宝如来たぼうにょらいなり、妙法蓮

華經げきやうより外ほかに宝ほう塔とうなきなり、法華經の題だい目もく・

宝ほう塔とうなり宝ほう塔とう又また南無妙法蓮華經なり

語句

宝塔

宝ほう物もつで飾かぎられた塔とう。法華經の見宝けんほう塔とう品ほん第11では、釈尊しゃくそんの法華經ほけぎょうの説せつ法ぽうが真しん実じつであると保ほ証しょうするために、多宝如来たぼうにょらいが中なかに座ざす宝ほう塔とうが大地だいちから出しゅつ現げんし、囑ご累るい品ほん第22まで虚こ空くうに浮うかんでい
た。この宝ほう塔とうは高たかさ500由旬ゆじゆんで、金きん、銀ぎん、瑠璃るりなどの七宝しちほう
で飾かぎられていた。この塔とうの内うちに釈迦しやか・多宝たぼうの二に仏ぶつが並ならんで座すわ
り、聴衆ちやうしゆも空くう中ちゆうに浮うかんで、虚こ空くう会えの儀ぎ式しきが展てん開かいされた。

多宝如来

法華經見宝けんほう塔とう品ほん第11で出しゅつ現げんし、釈尊しゃくそんの説といた法華經ほけぎょうが真しん実じつである
と保ほ証しょうした仏ほとけ。